

舞絶えた途 後世に残す

文化芸大生が展示

浜松市天竜区佐久間町の山あいにある神妻神社で明治時代まで伝えられたとされる舞を、静岡文化芸術大（同市中央区）の学生が調査し、実際に使われた仮面や神社の古文書の展示会を15日、同大ギャラリーで始めた。学生らは「消えてしまったお祭りを形に残し、後世に伝えたい」と話している。

（荒木正親）

調べたのは同大の二本松康宏教授と、学生12人。佐久間町や愛知県・奥三河など三遠南信地域一帯ではかつて、豊作や無病息災を願う神楽「花の舞」が営まれた。神妻神社も、その一つ。近くの集落の神社には「川合の花の舞」が今も伝わっており、その様子などから、神妻神社の花の舞について文化財の保護団体や市と協力して研究した。



神妻神社の花の舞に使われたとされる仮面など。浜松市中央区の静岡文化芸術大で

天竜・佐久間の祭事 仮面や古文書紹介

会場には手作りした結果や湯釜を配し、神楽の舞台と考えられる「舞処」を再現。真っ赤な顔に角やひげを生やし、荒ぶる様子がわかる「神鬼」など5枚の仮面のほか、神社に残る古文書8点、神社周辺を撮影した動画や写真を展示した。二本松教授と学生らは2年前から、三遠南信地域で途絶えた祭事を調べ、展示発表している。今回は第3弾の企画。国際文化学科3年の辻未空さん（20）は「過疎や高齢化で衰退する文化や伝承を残していきたい。その土地に生きていた人の記録を皆さまに見てもらい、思いをさせてもらえたら」と話す。

展示は20日まで。16日午後1時～4時半には有識者の講演があり、川合花の舞保存会（同市天竜区）が舞を披露する。